

マナー言説と「静かな」統治権力

都市鉄道における「快適性向上」と「迷惑行為」

国際基督教大学 根岸海馬

1 目的

鉄道駅や空港に代表される公共の場所では、不特定多数の人々が集まり、一定の空間や時間を共有する。こうした移動空間では、秩序はどのように維持されているのだろうか。本報告は、近年日本の鉄道事業者が挙って「快適な移動空間」を旅客サービスの一環として演出しているという点に着目し、その取り組みを考察する。事業者が「快適な移動空間」を演出しようとする際、何が排除され、何が「快適さ」の基準となるのか。これらの取り組みは、利用者間の相互行為の中でどのように解釈され、移動空間の秩序に影響を及ぼしているのか。

2 方法

文化人類学者のマルク・オジェ（1995）は、移動空間を「非-場所」と呼ぶ。オジェによれば、それは利用者が移動するという目的のためだけに集い、孤独に時を過ごす超近代的な空間であり、そのためそこで紡がれる経験に何らかの意味を見出すことは難しい。一方で、モビリティーズ論のジョン・アーリ（2007）によれば、「通過点」である移動空間は、利用者が出会い、多様な経験が紡がれる場所である。そしてそこでは、人と人・人とモノの間に関係が構築され、さまざまな出来事が展開される。本報告では、モビリティーズ論を援用しながら、移動空間、とくに日本の都市鉄道駅における秩序維持の過程に着目する。

3 結果・結論

多くの鉄道事業者は、マナーポスターや車内アナウンスなどによって「正しいマナー」や「迷惑行為」を利用者に周知している。本報告では、こうした鉄道事業者による取り組みを、利用者間の関係を制御し同意を強いる「非暴力的」および「静かな」統治権力として捉える。この統治権力を強化するのはしかし、鉄道事業者だけではなく、利用者自身でもある。ここでは「孤独に時を過ごす利用者」という理解を問いなおし、一過性ではあるものの利用者の間には複雑な関係性が構築される、そして、鉄道駅における秩序維持は、その関係性を媒介として行われていると指摘する。

本報告が取り扱うミクロな社会秩序の生成過程に関する問いは、その日常性のため、これまで分析されることが少なかった。しかし、この問いは、現代社会における統治権力の諸相を明らかにするという意味で非常に重要である。同時にこの問いは、現代日本の都市鉄道駅における統治権力の諸相を明らかにするだけでなく、領域横断的な「公共性」の議論の展開を可能にする。

[文献]

Augé, Marc. 1995. *Non-place: An introduction to supermodernity*. (trans. Howe, John.) London and New York: Verso.

Urry, John. 2007. *Mobilities*. London: Polity.